

# 株式会社 フジワラ

## 会社概要

- ・所在地 北海道北斗市
- ・業種 釣り具製造販売
- ・資本金 2,000万円
- ・設立 1967年3月
- ・従業員数 27人
- ・URL <http://fishing-fujiwara.com/index.html>  
<http://wwwc.ncv.ne.jp/~fujiyan/index.html>

## 1 40年以上、研究開発を継続

同社は、1967年釣り用オモリを製造・販売する会社として創業した。その後、40年以上にわたって研究開発を続け、北海道内におけるオモリのシェアは実に8割にのぼる。オモリだけではなく、集魚効果の高い仕掛けやイカの鮮度を長持ちさせる活け締め器など、長年の技術を駆使して人気商品を生み出してきた。

創業以来のメイン商品であるオモリは、環境に配慮した鉄製で製造している点に特徴がある。漁業や釣りで使われているオモリの多くは安価な鉛製で、人体や水中の環境への影響が懸念される中、2002年、同社は鉛フリーのオモリを開発した。デザイン性にも優れており「ものづくり日本大賞優秀賞」や「グッドデザイン賞」等、数々の賞を受賞している。



たゆまぬ研究開発力が同社の支え

## 2 海外展開は釣り人口の減少が発端

独自の技術を有する会社であるが、2000年頃から、韓国、中国、台湾でも販売を開始。現在では意匠登録も完了させている。

同社が海外に市場を求めた一番の理由は、日本国内の市場縮小にある。「魚離れ」という言葉に象徴されるように、食材としての需要が低迷。レジャーとしての釣り愛好家数も減少しており、海外に活路を見出す必要性があった。

最近では、ロシアから買付けの問い合わせが相次いでいる。北海道と漁場が似ているサハリンやウラジオストクでは、レジャーというより生活としての釣りが盛ん。長い冬場にコマイやキュウリウオと呼ばれる魚を1年分釣り、保存食として加工しておく。同社が15年の歳月をかけて生み出したブルーと呼ばれる仕掛けをはじめ、集魚効果が高い同社の釣り具が

高い人気を誇っている。

同社は、こういった独自の技術開発を行うにあたり、産学官の連携を最大限活用している。鉄製オモリの開発には、北海道大学大学院や北海道立工業技術センター（函館市）の技術指導や中小企業整備基盤機構の助成を受けた。藤原鉄弥社長（69歳）は、「鉄には錆びやすいという欠点があるので塗装が難しいと感じていましたが、専門家に協力してもらい、『商品に塗りムラが出る』という課題を克服することができました」と連携の成果を評価する。

さらに「海外で当社の商品を試験的に使ってみたところ、その商品を積んだ船だけ大漁になったという話を聞いたときは、幾多の課題を乗り越えてきたメンバーに感謝の気持ちでいっぱいになりました。今は耐久性に優れるスズを原料にしたオモリにもチャレンジしています。これも海外でヒットさせたいですね」と熱く語ってくれた。

## 3 韓国、ベトナムで新たな展開！

このような同社の海外での活動は、最近、新たな展開を見せている。

2013年4月、韓国において、藤原社長が同社の環境問題に関する講演を行った。その様子がテレビに大きく取り上げられ、現地の釣り雑誌にも掲載されたことから、同社のブランドは大きな注目を浴びている。韓国では釣り具の原料に鉛を使用することを禁止する法改正も検討されており、同社の鉛フリーのオモリの需要はますます増えることが予想される。同社は日本公庫の融資資金を韓国での市場調査費用として利用。2014年2月には現地のフィッシングショーに出品予定である。

また、同社は生産の一部を中国企業に委託しているが、昨今の人件費高騰を踏まえ、日本貿易振興機構（ジェトロ）や中小企業基盤整備機構にも相談しながら、「チャイナプラスワン」としてベトナム企業への生産委託を検討。コスト削減を図るとともに、東南アジアで顧客を探している。

藤原社長は、「環境に配慮したオモリをはじめ、長年培った技術を海外でアピールし、フジワラブランドを広めていきたい」と力強く語る。「環境」をひとつのキーワードに積極的な展開を図る同社のこれからの期待したい。



環境配慮への取組を世界へ広める（韓国での講演の様子）